

# AR CA DIA

74  
SPRING 2018

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽②③ 花と鳥のかたち

館長 榊原 悟

## 江戸の花園

面白い連作がある。酒井抱二(一七六二〜一八二八)の「十二ヶ月花鳥図」だ。月づきを代表する樹木・草花と鳥たちとを組合せ、二年〓十二ヶ月分を十二図に描き連ねる―と聞けば、本稿の読者ならば即座に「定家詠月次花鳥和歌図」を思い出して欲しいものだ(眼の極楽①③)。こちら月次〓十二ヶ月の花と鳥を描く。画題設定で両者は共通するところが少なくない。

だが異なる点もある。「定家詠図」が、その名にあるように、あくまで藤原定家の詠んだ花と鳥の歌にちなむ、いわゆる「歌意図」であったのに対し、「抱二ヶ月図」が純然たる「花鳥図」だと云う点である(眼の極楽①④)。それ故、前者には、歌に詠まれた「道ゆき人」や「かり人」、家屋や垣根など人事に係わるモチーフが、時に描かれているのだが(その好例が東京国立博物館の土佐光起本で、そこには花見に興じる人や、杉の戸を開け、初雁の声に耳を傾ける人の姿などが写される)、後者には、そうしたものは一切登場しない。まさしく花と鳥とに限られる。純然たる「花鳥図」と述べたのも、それ故だ。

では、その「抱二ヶ月図」が取上げた花と鳥とは、一体、どんなものであったのだろうか。だが、それを述べる前に一点確認しておきたいことがある。この連作には、複数の遺例があったことだ。それら諸本を列記すると、次の六本を数える。花と鳥と云う、ごく一般的モチーフを取上げたことから、つい見落してしまうが、これを単一のシリーズ〓画題とみれば、ひとりの絵師の遺例として異常に多い。しかし、それだけ需められ、つまりは好まれたのであろう。

- ・宮内庁三の丸尚蔵館本 全十二幅
- ・畠山記念館本(水野家旧本) 全十二幅
- ・心遠館(ブライスコレクション)本 全十二幅
- ・出光美術館本 六曲二双
- ・亀田綾瀬着賛本(零本 諸家分蔵) 五幅のみ現存

## ESSAY

### ・香雪美術館本

六曲二双

このうち出光本と香雪本は六曲二双の押絵貼屏風仕立て(二扇に二図を貼付した屏風)。他はすべて掛幅装で、現状では五幅のみの零本たる綾瀬本以外は、すべて十幅より成る。屏風装の出光本を紹介した河野元昭氏によれば、そもそもこの「抱二ヶ月図」の連作は、出光本がそうであるように、押絵貼屏風であつたらしく(出光本は原初のままの表装の可能性も高いと云う)、それを開いた時、谷折りで向かい合う二図が、あたかも対(双)幅であるかのように図様構成され、また落款の位置も定められていたと云う(河野元昭「抱二筆十二か月花鳥図考」『國華』二七五号 一九九三年)。立論の詳細は河野論文に譲るが、ともあれこれによって、従来より疑義が出されていた三の丸尚蔵館本の、例えば二月、三月分の花鳥の配列が正されると共に(村重寧「花鳥十二か月図」皇室の至宝2『御物 絵画II』毎日新聞社 一九九一年)、「抱二ヶ月図」の月づきの花と鳥とが確定した。花と鳥のモチーフそのものに興味を抱く者にとって、このことの特つ意義は極めて大きい。

加えてもう一点見逃し得ないのは、これらの連作の制作に関してである。唯一「文政癸未年」(文政六年・一八二三)の款記を伴わない、また緊密な図様構成になるところから、三の丸尚蔵館本が抱一の基準作であることは言うまでもないが、それ以外の諸本は、その落款に用いられた「筆」の字の書風の違いにより(抱一の落款は、「筆」の字の縦棒の右脇に点を伴なうものと、無いものとに二分され、前者を文政七年以降、後者をそれ以前とみることが定説化している。大野智子「酒井抱一の画風展開とその特色」『美術史』二六号 一九八九年)、すべて文政七年以降の作と見られ、しかも図様構成や画風が三の丸尚蔵館本と異なり、さらに諸本相互にもそうした作風上の違いが認められることから、これらの制作には複数の弟子たちが係わっていたと推定されるに至っている。抱一には、「必庵」なる弟子に代作を依頼する手紙が少なからず遺されていることも(必庵と号した弟子は鈴木其一と、その養父蠣澤とがいるが、ここでの必庵は、前者の可能性が高い)、こ

うした推定を裏付ける。

つまり「抱一十二月花鳥図」諸本は、三の丸尚蔵館本を除いて、すべて雨華庵工房あるいは鶯郵画房による、いわゆる工房制作であったのだ。むろん、雨華庵主たる抱一の指導のもと制作されたはずで、最終的に抱一の落款が加えられ、あくまで抱一の作品として注文主に渡され、流通したのである。心遠館本や出光本に捺された「雨華庵」の朱文扇印は、そうした工房作であることの意を暗に示しているのかも知れない。三の丸尚蔵館本を含めて、それが六点(セット)、これを多いと見るか少ないとするか。三の丸尚蔵館本を制作したのが文政六年、亡くなる文政十一年まで抱一に残された歳月は六年余。その限られた僅かの間に注文され、制作されたと見れば、やはりその数が尋常とは、とても云えまい。しかもそれぞれ全十二図から成る連作である。

となれば「抱一十二月花鳥図」は、それだけ江戸の鑑賞界で大きな支持を得ていたとみて誤りあるまい。むろん抱一の洒脱鮮麗な画風が受入れられたからである。ことに草花を繊細かつ華麗に写し出した「花鳥図」は、眼にも心地よく、抱一の最も魅力ある作であったに違いない。それが十二図揃う。「抱一十二月花鳥図」の人気も当然と云うべきだろう。

だが、それだけではあるまい。その人気には、もう一つ別の要因もあつたのではなかつたか。それこそはモチーフに係わる。要するに抱一が十二月、月づきを代表するとして選んだ花と鳥とが順当と認められ、支持されたのである。いわば「抱一十二月花鳥図」に描かれた花と鳥は、「江戸の花園」に咲き、遊ぶものたち、と云うべきだろうか。

ではその花と鳥とはどんなものであつたのだろうか。またそれらは、「江戸の花園」の名に相応しく、江戸の人びとの眼が見出したものであつたのだろうか。モチーフの選択そのものの時代性を問おうと云うのである。そこで「抱一十二月花鳥図」諸本に取上げられた花鳥を一覧表にまとめてみた。さらに抱一がこれを構想する際に必ずや念頭にしたはずの「定家詠図」と、「花鳥の変」をもたらしした狩野元信の「四季花鳥図」の花鳥を添えてみた。その間の異同を見ようと云うのである(この節未完)。

ESSAY

十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	
雪 啄木鳥 藪子	白 山 枯 露 菊 芦 未 末	目 柿 白 白	小 菊 禽 月	藤 桔 薄 袴 梗 芙蓉 月 花 子	青 朝 玉 蛙 顔 蜀 黍	蜻 石 紫 蛉 立 陽 花	鷓 燕 鴉 子 花	蝶 牡 丹	雉 櫻 子	蓮 菜 雀 華 土 筆 筆	鶯 紅 梅	尚蔵館本
雪 鶯 竹 鶯 鷓 鷓 子 子	白 鶯 枯 露 鷺 芦 末	懸 山 巢 茶 花	瑠 菊 璃 小 鷓 菊	鶯 桔 芙 月 梗 蓉 香 子	四 木 十 檀 雀 雀	雀 石 百 竹 立 合 葵	鷓 鷓 河 草 骨 骨 花	燕 芍 雀 藥	小 櫻 瑠 璃	雲 菜 雀 花	鶯 紅 梅	畠山本
雪 鶯 竹 鶯 鷓 鷓 子 子	白 鶯 枯 露 鷺 芦 末	鳥 柿	小 菊 禽 月	馬 桔 薄 追 梗 撫 月 花 子	蟻 朝 向 螂 顔 日 葵	蜻 檜 紫 蛉 扇 陽 花	鷓 鷓 河 草 骨 骨 花	蜜 鐵 薔 蜂 線 薇	燕 櫻 熊 笹	雀 白 梅	朝 小 蒲 日 禽 公 葵	心遠館本
雪 鶯 紅 鶯 鷓 梅 子 子	白 鶯 枯 露 鷺 芦 末	目 柿 白 白	瑠 菊 璃 鷓 竹	馬 桔 薄 追 梗 撫 月 花 子	蟻 朝 向 螂 顔 日 葵	蜻 山 紫 蛉 扇 陽 花	鷓 河 燕 骨 骨 子 花	蝶 岩 牡 丹	小 櫻 瑠 璃	雲 菜 雀 花	朝 小 蒲 日 禽 公 葵	出光本
	白 鶯 枯 露 鷺 芦 末	目 柿 白 白	瑠 菊 璃 鷓					蝶 岩 牡 丹	小 櫻 瑠 璃			綾瀬本
雪 鷓 水 鷓 仙	雀 木 木 十 雀 菟 雀 雀	白 榛 梅 菊	楓	鈴 霞 薄 虫 草 瓜 月 瓜	水 向 引 日 葵	蛭 夕 顏	鷓 燕 鴉 子 花		藤	連 董 翹	鶯 竹 白 梅	香雪本
雪 鶯 早 鶯 梅	千 枇 鳥 杷	鶴 殘 菊	鶯 薄	初 鹿 雁 鳴 草	鶯 女 郎 花	鶯 常 夏	水 虚 鷓 橘	郭 卯 公 花	雲 藤 雀	雉 櫻 子	鶯 柳	定家詠
	雪 小 鶯 鶯	雪 小 鶯 鶯	白 錦 梅 鷓 鳥	楓 秋 (紅葉) 草 芙蓉			小 孔 禽 鷺 雀	緋 竹 扇 丹 子	牡 躑 春 躑 草 躑	紅 櫻 梅		元信(四季花鳥図)

「抱一十二月花鳥図」モチーフ一覧



アジア初の回顧展である「クエイ兄弟―ファントム・ミュージアム」は、二〇一六年に神奈川県立近代美術館で始まり、ついに岡崎会場でフィナーレを迎えます。今回は、本展とクエイ兄弟のご紹介をしたので、今号では、本展の出品作品からイチオシの見どころをご紹介します。

まず、一章の出品作品には、クエイ兄弟が制作したドローイングやコラージュ、彼らが影響を受けた東欧のポスターなど、バラエティ豊富な内容で構成されています。とりわけ、一九七〇年代に制作された『ラボネキユイエル城』をはじめとした「黒の素描」と呼ばれる一連の作品群は、後のクエイ兄弟の創作に関連が深いものとして理解できる重要な展示です。例えば、『ラボネキユイエル城』（図1）は、クエイ兄弟が映像作家として最初に制作した短編映画『人工の夜景―欲望果てしなき子ども』（一九七九年）において、六番目の五章（註1）に登場します。「低い天井にパンドグラフィがつかえつつ路面電車は大聖堂を通り抜ける」とテキストが付されたこの章に登場することから、ドローイング作品『ラボネキユイ

エル城』にはCHATEAU(城)という言葉が書き込まれていますが、描かれた建物に十字架があること、加えて『人工の夜景』においてもcathedral(大聖堂)という言葉が出てくることから、この建物は大聖堂であると考えられます。

次に、本展の中で最も核となる二章では、映像作家・クエイ兄弟の創作を、実際にアニメーションの撮影に用いたセットとパペットを再構成して箱に収めた「デコール」と彼らの映像作品を比較しながらご覧いただくことができます。箱に収められたデコールは、どれも精巧に造られており、パーツのサイズは小さいものが多くありますが、立体作品として観た時に、非常に愉しめるものとなっています。また、通常のデコールにおいても、一見、映像作品のワンシーンを再現しているように感じますが、デコールの空間の中には映像作品中に用いられたモチーフが、ワンシーンで登場しているかのよう構成されています。例えば、一八四年に制作された『ヤン・シュヴァンクマイエルの部屋』に登場するパペットやセット、小道具たちを収めたデコール『プラハの錬金術師』（図2）も再構

## EXHIBITION

成された作品のひとつです。繊細な造形にも注目してご覧いただきたい作品ですが、さらに映像の中に登場したモチーフがどの場面に出てきたのか、彼らの映像作品を思い出しながらご覧いただくと、より面白く感じられる作品です。

最後に、三章から五章では、彼らが手掛けるミュージック・ビデオ、コマーション、舞台美術や展覧会での取り組みなどをご紹介します。三章においても、クエイ兄弟の手掛けたミュージック・ビデオやコマーションのご紹介と一緒に「デコール」も出品されています。デコール『BC2のアイデント』（一九九一年、表紙）は、『カリグラフィ―パート1、2、3』（一九九一年）に用いられたセットです。本展では、『カリグラフィ―』のための試作とも比較して作品観ることができ、アイデアが作品に変遷していく過程もお楽しみいただけます。

クエイ兄弟が創り出す、緻密で繊細な世界をぜひご堪能ください。

註1 全八章の構成。本作は、五章と六章の順が逆転している。



図1



図2

図1 クエイ兄弟『ラボネキユイエル城』1970年代 Courtesy of Museum of Modern Art, New York

図2 クエイ兄弟『ヤン・シュヴァンクマイエルの部屋』より デコール『プラハの錬金術師』1984年 photo©Robert Baker

会期：平成30年4月7日(土)～5月20日(日)

企画展

# クエイ兄弟

―ファントム・ミュージアム

高見翔子

# 名刀は語る —美しき鑑賞の歴史

浦野加穂子

日本刀は、古来信仰の対象となり、災厄から身を守り、邪気を払う靈器として神聖視されました。武士にとっては、刀は武器であるとともに精神的支柱でもあり、日本人の精神文化に大きな影響を与えてきました。

また日本刀は日本を代表する美術品として、世界でも高い評価を得ています。その優美な姿、千変万化する刃文、玄妙な趣をたたえる地金などその見どころは多彩です。

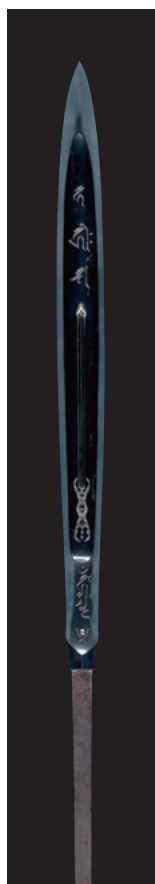
ところで、名刀が今も美しい輝きを放っているのは、鍛刀されてから今日に至るまでの千年の間、それを守り続けてきた人々がいたためです。名刀を手にした人々は、それに相応しい人物になるべく自己を磨いてきました。名刀は多くの人々の手に渡り、その間に様々な物語が生まれ、今日に伝えられてきたのです。

本展では、日本屈指の刀剣コレクションを誇る静岡県三島市の「佐野美術館」の収蔵品より、国宝・重要文化財を含む平安時代から江戸時代の代表的な名工の刀剣、刀装具を一堂に展示し、約千年にわたる日本刀の歴史を辿りながら、日本人が培ってきた美意識や文化を紹介します。

## EXHIBITION

また岡崎ゆかりの武将である本多忠勝愛用の名槍「大笹穂槍 銘 藤原正真作(号 蜻蛉切)」の特別出品に合せて、忠勝所用の「黒糸威胴丸具足」(重要文化財)をはじめとする本多家の名宝を展示します。本槍はトンボが穂先に触れるや否や二つになつたという切れ味の鋭さから「蜻蛉切」呼ばれています。持主の本多忠勝は天文十七年(一五四八)現在の岡崎市に生まれ、その生涯は徳川家康のもとで天下統一に尽力し、徳川四天王の一人に数えられています。黒糸威の具足を身にまとい、鹿角兜をいただいた姿は、戦国武将像の典型として知られています。

さらに本展では、中世矢作で活躍した薬王寺派など三河の刀工の名品もご覧いただき、その実像に迫ります。薬王寺派の刀工は、中世矢作宿が栄えていた時代に現在の岡崎市矢作地区で活躍した鍛冶集団です。岡崎市西本郷町または宇頭町に位置したとされる薬王寺の名称を刀銘に切るので、薬王寺派と呼ばれています。同派は美濃国の



兼春が当地に移住して開き、正長の頃(十五世紀前期)助次が「薬王寺」の銘を打つたとされています。薬王寺派の作品は三河を代表する古刀ですが、現存するものが少なく、その実態は謎に包まれています。十六世紀後半には薬王寺派にかわり、平安城長吉や三河文殊正真が三河で活躍しました。「蜻蛉切」の作者である正真は大和文殊派の刀工とされ、渥美郡田原(現在の田原市)に移り住んだため三河文殊と称されています。徳川四天王の一人、酒井忠次の指料「刀銘 正真 裏金象嵌銘 猪切」も正真の作であり、家康の前で酒井忠次が猪を切つたことから「猪切」と命名されています。また三河一向一揆で活躍した蜂屋半之丞の槍は長吉の作であるように、まさに正真や長吉は家康に仕えた三河武士たちとともに、三河の戦国時代に活躍した名工といえます。

日本刀の一振りひとふりの美しさを心行くまで御鑑賞ください。そして、それぞれの日本刀が語りかける物語に耳を傾けていただければ幸いです。

静岡県指定文化財「大笹穂槍 銘 藤原正真作(号 蜻蛉切)」室町時代〈矢部コレクション〉(佐野美術館寄託)

会期：平成30年6月2日(土)～7月16日(月・祝)

## 平成二九年度の収集作品について

浦野加穂子

当館では皆様の御協力のもと、毎年様々な博物資料、美術品を収集しています。今年度の主な収集作品をご紹介します。

### 【寄附】

「龍溪院・桑原村山論裁許絵図」

龍溪院（桑原町）と奥殿藩領桑原村の山論の裁許絵図。争論は龍溪院領の山に桑原村百姓が入会山であると主張して侵入し、これに対し幕府は桑原村の主張を退け、龍溪院領民の利用を認めています。縦二五〇cmを越える絵図で『新編岡崎市史』未掲載の新出資料です。

「志賀重昂漢詩色紙」

世界的な地理学者である、志賀重昂の七言絶句です。詩中に慶州途上とあり、日露戦争時の情景を詠んだものと推察されます。志賀は明治三十七年に従軍記者として旅順攻囲軍に同行しています。

「ミシン（足踏み式）」

社会人類学者・東大名誉教授で、三州葵市民である中根千代氏の愛用品です。当時輸入品のシンガミシンは高級品で、本資料はシリアルナンバーから一九二三年にアメリカで製造されたことが判明しました。

「長谷川瀧二郎 使用モチーフ」

昭和期に活躍した洋画家、長谷川瀧二郎が絵画制作の際に使用していたモチーフです。二〇一六年「長谷川瀧二郎展」にて展示しました。

### 【寄託】

「三角身鍮銘 肥後守藤原輝廣作」

三嶋神社（上六名町）に伝来する鍮で、桃山から江戸時代初期に造られたとみられます。作者の輝廣は濃国関出身の刀鍛冶で、本鍮は岡崎城主の水野忠善が三嶋神社建立時に奉納したとみられます。

「瀬戸染付香炉」

蓮華寺（西本郷町）に伝わる香炉で、作者の加藤民吉は文化四年（一八〇七）伊万里から製磁の技法を伝え、瀬戸磁器の祖と言われる名工です。岡崎市指定文化財。



## 史料叢書刊行余話

湯谷翔悟

この館で勤務するようになって以来、大して古文書も読めないくせに肩書きだけ史料叢書担当となっている。例年なら校正をしてくれている非常勤の職員にエラそうに指示だけしていれば良いのだが、今年は俳書の二大コレクションである大磯義雄文庫の目録刊行も同時に進めているため、史料叢書の編集は自身の手で行わなければならぬ。結果、三河の秋葉信仰展終了後から校正に追われる日々となっている。校正には文字が消せるボールペンが大活躍しているのですが、試しに捨てずにとっておいたインク切れの替え芯が、赤八本・青二本・黒一本機の引出しにたまっている。

平成一四年に『中根家文書 上』を刊行して以来、岡崎市史料叢書のシリーズとして、これまで『中根家文書 下』、『長嶋家御用日記』、『大樹寺文書（上・下）』を世に出してきた。六冊目となる『瀧山寺文書 上』では、三河の中世を語る上で欠かせない瀧山寺縁起をはじめとし、近世の寺領経営を示す史料や、瀧山東照宮に関する記録、明治初年の神仏分離や上知に伴う変革を示す史料、約九〇点を収録した。なお平成三二年刊行予定

の下巻では、瀧山寺の寺務記録である「年行事記録」を収録する予定としている。

しかし毎回頭が下がる思いになるのが、史料叢書の翻刻をさせていただいている古文書研究会の方々である。古文書の画像コピーを渡して翻刻をしてもらっているのだが、写真では小さくて判別できないような字でも読んであつて、半信半疑で高解像度の画像を拡大して確認すると正しい字であり驚く、ということがしばしばある。人員の少ない事務局にあつても、史料叢書がある程度の質が保てているのは、この方々の力があつてこそである。



瀧山寺本堂

## EXHIBITION



## 芳賀前館長が日本芸術院賞受賞

堀江登志実

館長の芳賀徹先生が日本芸術院賞を受賞された。芳賀先生おめでとうございます。芳賀先生には平成一〇年から二三年までの十三年間に渡りご指導いただいた。当館館長時代には京都造形芸術大学学長を兼務された時期もあり、学会、海外出張と多忙のなかをぬって来館いただいた。先生の専門は比較文学である、その幅広い見識と鋭い着眼点に、私たちは職員はついてゆくのが精一杯だった。先生は博物館や美術館での指導経験はなかったが、その高い見識による発言は刺激的で常に私たち館員の叱咤激励となった。

また、イメージを湧かせる巧みな話術にも敬服したものであった。先生の岡崎での館長時代の業績は退任される前の展覧会「桃源万歳―東アジア理想郷の系譜」に結実している。先生の熱い思いを展示表現することは、海外からの借用などもあり大変であったが、良い思い出となっている。学校教育との連携についても先生は力説され、その方針は展覧会ごとに小中学生をバスで招いての見学、小学校三年生を対象とする「暮らしのうつりかわり展」での見学にも引き継がれている。先生は日本の俳句文学を世界に普及

するうえで貢献されているが、市内の小学校に向向いて俳句の出前授業を行ったこともある。確か六ツ美中部小学校だったと記憶している。先生の著作はいくつかあるが、岡崎での館長時代のものに「藝術の国日本―画文交響」がある。同書は日本の絵画・文学を論じたものであるが、ここには当館ニュースである「アルカディア」の冒頭を飾った芳賀館長の軽妙なエッセイを題材としたものも含まれている。先生は現在八十六歳である。先日、私の退職を電話でお伝えした時は元気なお声であった。先生、お体を大切にいつまでもご活躍ください。



小学校で出前授業をする芳賀前館長

## COLUMN & TOPIC

## 退職者の言葉

堀江登志実

平成三〇年三月を以て定年退職となりました。岡崎市への奉職は三十七年間に及びますが、そのうち美術博物館での在職は二〇年間です。学芸員として展覧会、資料の収集、調査研究の活動から、副館長として市議会対応、講演会まで様々のことを体験させていただきました。ここまで学芸員として意識を保持しながら活動を続けることができたのは二重に館の職員と諸先輩の方々の協力と理解があったることと感謝しています。

「矢作川展」(H11)、「松平・徳川氏の寺社展」(H12)、「岡崎の文化財展」(H13)、「田中吉政展」(H17)、「徳川四天王展」(H18)、「単人がゆく」(H19)は私が担当した自主企画です。いずれも思い出深い企画展で、なかでも、美術博物館に異動になってから最初に担当した「矢作川展」は、私が西三河の舟運・流通に興味を持つことの契機となった企画展で、その後の私の学芸員としての活動に大きな影響をあたえることになった企画展です。愛知県史の調査にも参加しながらその問題関心は拡大していきました。それから二〇年を経た今でも河川の舟運・流通は自分の問題関心のなかで

は大きな比重を占め、その範囲は東三河の豊川舟運にまで広がっています。学芸員にとって展覧会は一過性のもですが、問題意識は持続されてゆべきものと考えます。

岡崎市に就職して間もない頃に興味を持ったことに秋葉山常夜燈があります。なぜ、岡崎に秋葉山常夜燈が多いのかという単純な問題関心から調査を行い発表したことがあります。三〇年も前に興味をもったことが、平成二九年開催の「三河の秋葉信仰展」で湯谷学芸員が見事に結実させてくれました。秋葉信仰を最後に展示で具現化できたのはうれしかった。学芸員として自分の問題関心が形となる展覧会はこの上ない喜びである。



# INFORMATION

## ■平成30年度企画展

### クエイ兄弟—ファントム・ミュージアム

4月7日(土)～5月20日(日)

□スペシャル・トーク「クエイ兄弟の夢の世界」

日時:5月6日(日)午後2時～

登壇者:滝本誠氏(映画評論家)「クエイ兄弟の手作り魔術」

赤塚若樹氏(首都大学東京教授)「ふたりの好きなもの」

□上映会

日時:5月3日(木・祝)午後2時～

『ギルガメッシュ叙事詩を大幅に偽装して縮小した、ハナー・ルウス局長のちよつとした歌、またはこの名付け難い小さなほうき』1985年

『変身』2012年

『スティル・ナハト2—私たちはまだ結婚しているのか?』1992年

□ギャラリートーク

日時:5月12日(土)

午後2時～

## ■平成30年度特別企画展

### 名刀は語る—美しき鑑賞の歴史—

6月2日(土)～7月16日(月・祝)

□講演会

①日時:6月9日(土) 午後2時～ 「佐野美術館のコレクションについて」

講師:渡邊妙子氏(佐野美術館館長)

②日時:6月23日(土) 午後2時～ 「刀装具とはじめ—美術史の視点から」

講師:内藤直子氏(大阪歴史博物館学芸第2係長)

③日時:7月7日(土) 午後2時～ 「日本刀の魅力」

講師:久保恭子氏(日本美術刀剣保存協会博物館事業課長・刀剣博物館主任学芸員)

□歴史講座

日時:7月1日(日) 午後2時～ 「三河の刀工をさぐる」

講師:堀江登志実(当館前副館長)・浦野加穂子(当館学芸係長)

□ギャラリートーク

日時/6月16日(土)・6月30日(土) いずれも午後2時～

## 繭を煮る匂い

信州は岡谷市の岡谷蚕糸博物館をご存じですか。シルクを五感で感じることが出来る世界的にもまれな博物館で、愛称は「シルクファクトおやかや」。蚕糸業についてとても充実した、そして体感度の高いミュージアムです。

ここには宮坂製糸所という会社が併設されていて、博物館の動態展示エリアとして工場見学ができます。オートメーション化された練糸機も感動ものですが、今では見ることのない伝統的な繰糸鍋を使った生糸作りは必見です。熱湯で煮ながらの繭から長い長い糸が引つ張り出される不思議さ、その手さばきの見事なこと。と同時に、そこには繭を煮る独特な匂いが充満すること。本から得た知識だけでは匂いなんて思いもせず、そして、繭を煮るということは、本来は羽化する繭の創造主を殺してしまうということ。脇に取り除かれた茶色の物体の正体を教えて貰った時はショックでした。

仕事柄、この手の資料に接する機会があるとは言え、なんだかよく分からないまま手探り状態の自分にとつては、まさにパズルのピースがピタッとはまっていくような嬉しさを覚える内容満載の施設でした。百聞は一見に如かず、繭を煮る匂いも勉強になりました。でも、あの匂いは苦手です。(伊)

## おしゃべり、あれこれ。

### 昔の思い出

三月上旬、資料調査の手伝いに駆り出されて中島町へと赴いた。同僚が運転する車中でのんびりと流れていく風景を眺めていたが、不意にある高圧鉄塔に目が行った。ちょうど二十年前にある開発事業に伴う試掘調査で水準点を設置した場所であった。その周囲に広がっていた綿畑を調査したのだが、当時は見渡す限りの水田ばかりで試掘抗の中で湧き出す水と戦いながら、遺物を探集し、遺構を実測したことを思い出した。今は県道も通り、見違えるような街も広がっているが、調査をしていた頃はそんなことになるとは露とも思わなかった。

その場所では後に本発掘調査が実施され、古墳時代から中世にかけての集落があったことが確認されたが、当時はそんなことは予想もできなかった。

発掘調査ではよくあることであるが、同じ場所に何層かの時代の層が重なって確認されることがある。記録保存というところで調査をするのだが、今ある街もいつかは埋もれていく時が来るのである。

博物館はそういう時の流れを残すためにあるのだなというように、二十年前の風景を思い出していた。(内)

編集後記 | 平成30年度が始まりました。今年度は、刀剣やジュエリーなど、珍しく工芸品の展覧会が続きます。皆様、どの展覧会もどうぞお楽しみに!

私は、3月をもって退職することになりました。岡崎市美博では、館内外の多くの方々に助けられ、充実した2年間を過ごしました。お世話になりました皆様に、深く感謝申し上げます。次号から本誌の編集担当が変わります。引き続きアルカディアをよろしく願い申し上げます。(菊地)

表紙図版:クエイ兄弟 デコール《BBC2のアイドント》1991年 photo©Robert Baker



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第74号 2018年4月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)